
はしがき

ポリー・ザトラウスキー

本書は2018年度日本語教育学会春季大会での「食べ物を通した日本語教育—体験を語る評価、オノマトペ、感覚表現—」というパネルセッションがきっかけとなり、出版の計画が始まった。その時の発表者である水藤新子（レトリック）と福留奈美（食品科学・日本語教育）が本書の「食を創る」、ポリー・ザトラウスキー（言語学・会話分析・日本語教育）が「食を評価する」に執筆している。また、中村明早稲田大学名誉教授（レトリック・文体）にも随筆を書いていただいた。2010年～2018年は高崎みどりお茶の水女子大学名誉教授（日本語学・日本文学）が責任者で、2018年～現在は香西みどり教授（食品科学）が責任者である、お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所の比較日本学教育研究部門での「英語・日本語における食べ物に対する感覚評価と文化的アイデンティティ」というプロジェクトが進行しているが、石井久美子（日本語学）が学内研究員、福留が学内協力員、ザトラウスキーと星野祐子（日本語学・日本語教育）が客員協力員となっている。そこで星野は本書の「食を教える」で、高崎名誉教授と石井が本書の「食を語る」で論文を書いていただいている。2013年にお茶の水女子大学第8回国際日本学コンソーシアム「食・もてなし・家族II」でザトラウスキーと小池千里（言語学・会話分析・日本語教育）が招待され、食と日本語に関する発表をした。小池は本書の「食を評価する」で執筆している。

一方、海外で行われる国際語用論学会、全米日本語教育学会、全米人類学会等で同じ時期に言語と食の研究をテーマとしたパネルセッションと学会が

開かれ（末尾の学会等のリスト参照）、ザトラウスキー、小池、福留、唐津麻理子（言語学・会話分析・日本語教育）が発表した。唐津は本書の「食を評価する」の執筆者である。このように本書の執筆者のほとんどは2010年以来研究活動を共にしてきた者たちである。武藤彩加（意味論・認知科学）、石原洋子（日本語教育）は論文や学会活動を通じて知り合い、執筆者に加わってもらった。本書の「食を教える」の執筆者である。

なお、2017年に「食の言語学」という新しい分野がAILA (Association Internationale de Linguistique Appliquée/ International Association of Applied Linguistics 国際応用言語学会) に認められ、現在国際研究ネットワークが設立されている (<http://www.linguistics-of-food.org/>)。2021年の8月には“Whose taste matters? Authority, meaning, and culture in the linguistics of food”（誰の嗜好が大事か？食の言語学における権力、意味、文化）というシンポジウムがAILA 2021 World Congress (AILA2021 年度世界大会) で開催された。「食の言語学 (Linguistics of Food)」の研究に興味がある方は、ぜひこの研究ネットワーク（無料）にお入りください。

学会等のリスト（執筆者がしてきた食と日本語に関するパネルセッションと発表の年度、パネルセッションの題名、学会名、発表者名）

国内のパネルセッション

2018 「食べ物を通した日本語教育—体験を語る評価、オノマトペ、感覚表現—」パネルセッション、2018年度日本語教育学会春季大会 水藤新子、ポリー・ザトラウスキー、福留奈美

国内の言語学、認知言語学、社会言語学、日本語学等の学会発表

2010 日本認知言語学会第11回全国大会 武藤彩加

2010/2015 表現学会第47回／52回全国会議 ポリー・ザトラウスキー／星野祐子

2012 言語文化学会第26回大会 武藤彩加・副島健作

2012 社会言語科学会第34回大会 武藤彩加

2012 日本語文法学会第13回大会 ポリー・ザトラウスキー

- 2013, 2019 日本語学会春季大会 ポリー・ザトラウスキー
 2016 日本語教育学会研究集会 武藤彩加
 2017 日本語用論学会メタファー研究会 武藤彩加
 2018 日本認知科学会第35回大会 原田康也・森下美和・平松裕子・福留
 奈美・佐良木昌
 2018 計量国語学会第62回大会 福留奈美・伊尾木将之
 2018 早稲田大学の思考と言語研究会 福留奈美
 2018 日本文体論学会第114回大会 星野祐子

国内の食品科学の学会発表

- 2010 日本家政学会第62回大会 福留奈美・香西みどり
 2012/2013/2015/2016/2017/2018 日本調理科学会平成24年度大会 福留奈
 美・香西みどり／福留奈美・立山和美・笠松千夏・香西みどり／福留奈
 美・露久保美夏／福留奈美・室谷純子／福留奈美・池田彩子／福留奈
 美・池田彩子
 2019 ジャパンミルクコンGRESS 2019 Milk Congress 福留奈美

日本語による国際学会のパネルセッション

- 2014 「食べ物に関する日本語の文章と談話におけるオノマトペの用い方に
 ついて」パネルセッション、第14回EAJS(ヨーロッパ日本研究協会)
 国際会議 高崎みどり、星野祐子、ポリー・ザトラウスキー

日本語による国際学会の発表

- 2013 韓国日本語学会第28回学術発表会 武藤彩加
 2013 お茶の水女子大学第8回国際日本学コンソーシアム「食・もてなし・
 家族II」小池千里、ポリー・ザトラウスキー
 2014 第10回国際日本語教育・日本研究シンポジウム 武藤彩加
 2015/2018 CAJLE (Canadian Association for Japanese Language Education
 カナダ日本語教育振興会) 武藤彩加
 2016 ICJLE (International Conference on Japanese Language Education 日本
 語教育国際大会) 武藤彩加
 2017 『日本学研究所』創設記念シンポジウム カイロ大学 武藤彩加
 2020 第11回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ11) 招待講演 ポリー・ザ

トラウスキー

英語による国際学会のパネルセッション

- 2009 “Experiencing food through language and the body in Japanese and English” (日本語と英語における言語と身体を通しての食べ物の体験) パネルセッション、11th International Pragmatics Conference (第11回国際語用論学会大会) Chisato Koike, Courtney Dolinar-Hikawa and Polly Szatrowski, Polly Szatrowski
- 2011 “Experiencing food through verbal and nonverbal behavior across languages” (諸言語にわたってみられる言語・非言語行動による食べ物の体験) パネルセッション、12th International Pragmatics Conference (第12回国際語用論学会大会) Chisato Koike, Mari Noda, Polly Szatrowski, Mamadou Bassene and Polly Szatrowski
- 2013 “Japanese and English stories about and over food: Verbal and nonverbal negotiation of assessments, categories, and knowledge” (食べ物に関する日本語と英語によるストーリー—評価、範疇、知識の言語・非言語を通しての交渉—) パネルセッション、13th International Pragmatics Conference (第13回国際語用論学会大会) Chisato Koike, Polly Szatrowski
- 2015 “Adapting food, adapting language” (食べ物の適応、言語の適応) パネルセッション、14th International Pragmatics Conference (第14回国際語用論学会大会) Polly Szatrowski
- 2016 “Embodied actions, multimodality, and environmentally coupled gestures across Japanese conversational genre” (日本語会話のジャンルにわたる身体化された行為、マルチモダリティ、環境と結び付いた身ぶり) パネルセッション、7th ISGS (International Society for Gesture Studies International Conference 第7回国際身ぶり学会の国際大会) Polly Szatrowski
- 2017 “English and Japanese assessment/ evaluation of dairy and snack foods in individual sensory evaluation, focus groups, and spontaneous conversation” (個人の官能評価、フォーカスグループ、自然談話でみられる、乳製品とスナック菓子に対する英語と日本語の評価・査定) パネルセッション、

- 15th International Pragmatics Conference (第15回国際語用論学会大会)
 Nami Fukutome and Polly Szatrowski, Mariko Karatsu, Polly Szatrowski
- 2019 “Humor and food in English, Japanese and German spontaneous conversational interaction” (英語、日本語、ドイツ語の自然談話における食べ物とユーモアについて) パネルセッション、16th International Pragmatics Conference (第16回国際語用論学会大会) Chisato Koike, Polly Szatrowski

英語による国際学会の発表

- 2011 IEMCA2011 10th Conference of the International Institute for Ethn methodology and Conversation Analysis (第10回エスノメソドロジと会話分析の国際研究所2011年度大会) Polly Szatrowski
- 2016 ILA (The International Linguistic Association) 61st Annual Conference: Culinary linguistics (第61回国際言語学会「食べ物の言語学」) 基調講演 Polly Szatrowski
- 2017 Intersubjectivity in Action conference (行為における間主観性学会) Polly Szatrowski
- 2018 ICPEAL (The International Conference on the Processing of East Asian Languages 東アジア諸言語処理国際学会) 17 Nami Fukutome
- 2018 International Conference on the Language of Japanese Food (日本の食べ物を表す言語についての国際大会) 基調講演 Polly Szatrowski

全米日本語教育学会でのパネルセッション

- 2010 “Verbal and nonverbal experience of food in Japanese” (日本語による食べ物の言語・非言語的な体験) パネルセッション、ATJ (Association of Teachers of Japanese) 2010 Annual Conference (全米日本語教育学会2010年度大会) Chisato Koike, Mariko Karatsu, Polly Szatrowski
- 2011 “Writing and talking about food in Japanese: Evaluation, gender and style” (日本語による食べ物についての文章・談話—評価、ジェンダー、スタイル—) パネルセッション、ATJ (Association of Teachers of Japanese) 2011 Annual Conference (全米日本語教育学会2011年度大会) Polly Szatrowski, Mariko Karatsu, 高崎みどり

- 2016 “Reference in native Japanese, nonnative Japanese, and English written and spoken discourse” (母語話者の日本語、学習者の日本語、母語話者の英語による文章・談話での言及表現について) パネルセッション、AATJ (American Association of Teachers of Japanese) 2016 Annual Conferences (全米日本語教育学会 2016 年度大会) Polly Szatrowski
- 2017 “Of clouds and water: The beauty of experiential learning” (雲と水—体験学習の魅力—) パネルセッション、AATJ (American Association of Teachers of Japanese) 2017 Spring Conference (全米日本語教育学会 2017 年度春季大会) Polly Szatrowski and Fumio Watanabe

全米人類学会大会でのパネルセッション

- 2013 “Affect, assessment, and categorization in stories and experiences with food” (食べ物に関するストーリーと体験における感情と評価と範疇化) パネルセッション、2013 AAA (American Anthropological Association) Annual Conference (全米人類学会 2013 年度大会) Chisato Koike, Polly Szatrowski
- 2018 “Gesture and embodied interaction in food-related talk” (食べ物と関連したストーリーにおける身ぶりと具体的な相互交渉) パネルセッション、2018 AAA (American Anthropological Association) Annual Conference (全米人類学会 2018 年度大会) Chisato Koike, Polly Szatrowski

米国での学会発表

- 2015 64th Midwest Conference of Asian Affairs (64 回アジア事情に関する中西学会) Mari Noda
- 2019 AATJ (American Association of Teachers of Japanese) 2019 Spring Conference (全米日本語教育学会 2019 年度春季大会) Polly Szatrowski

本書を刊行するに当たり、くろしお出版の岡野秀夫社長をはじめ、編集部の荻原典子氏より多大の配慮を賜ったことを、記して感謝申し上げます。また、索引作りでお世話になった後藤愛花氏にも感謝いたします。

目次

はしがき	ポリリー・ザトラウスキー	i
『五感で楽しむ食の日本語』の紹介と展望	ポリリー・ザトラウスキー	1
桜鯛、虹鱒、松風、時雨、杉盛り—食文化と比喻・象徴をめぐる随感—	中村明	33

第1部 食を創る

レシピのオノマトペ—調理の手法を伝える表現—	水藤新子	45
食感を表すオノマトペ—クックパッドのレシピに見るおいしき表現—	福留奈美、伊尾木将之	67

第2部 食を評価する

「生クリーム、大好き。」 —食べ物の嗜好は語りを通してどのように共有されるか?—	唐津麻理子	91
会話における食の評価と言語行動—評価は食前から始まる—	小池千里	115
テレビの料理番組での視聴者が食べたくなる食べ物の評価	ポリリー・ザトラウスキー	139

第3部 食を教える

おいしさのカタカナ語の類義分析 —「スイートな」「ヘルシーな」「フレッシュな」があらわす意味—	武藤彩加 165
トレンドスイーツをめぐるオノマトベのひろがり —チョコレートの味・香り・食感をどのように伝えるか—	星野祐子 185
外国人介護士が悩む食事介助の相互作用フレーム —「ごっくん」から「嚥下」へ—	石原洋子 203

第4部 食を語る

「インド人もびっくり」から「だんご3兄弟」まで —食生活の引用による弁論パフォーマンス上の第3空間的駆け引き—	野田真理 227
大正期の『少女の友』の食のことは	石井久美子 245
どう描かれる？ 漱石・鷗外の“食べる”	高崎みどり 267
事項索引	287
飲食物索引	295
人名索引	301
執筆者紹介	305

『五感で楽しむ食の日本語』の 紹介と展望

ポリー・ザトラウスキー

1. はじめに

日本では世界中の食べ物に対する関心が高い。そして食べることだけではなく、グルメレポート、ドラマ、旅行、クイズのTV番組、新聞、雑誌、書籍、ブログ、日常会話等で食べている物の描写、評価、特定(食べている物は何であるか)で実に様々で豊かな表現が用いられている。また、食べ物についての話では、アイデンティティーや価値観、信念が示され、互いにモニターしながら、変わっていく生活世界を構築し、絆を強化している。

欧米では、21世紀に入って言語と食べ物に関する本が数多く出版されている(Counihan 2004, Lavric and Konzett 2009, Newman 2009, Pinnavaia 2010, Gerhardt, Frobenius and Ley 2013, Jurafski 2014, Szatrowski 2014c, Diederich 2015)。しかし、日本では「食のことば」(柴田・石毛編 1983)、「美味しい表現」「味ことば」の意味と比喩に関する研究(瀬戸他 2003, 2005)、食品の購入のための「「おいしい」言葉」「シズルワード」に関する調査研究(大橋+シズル研究会 2010、B・M・FT ことばラボ 2016, 2018)、食品科学に関する「食品テクスチャー研究」(山野 2011)以外言語と食に関する本が少ない。

本書は食にまつわることと日本語との関係を様々な観点から考察する。ここで言う「食」は食べること自体はもちろん、食べる前後の、食べることと関係あるものも含む。例えば、調理については料理本やインターネットで検

桜鯛、虹鱒、松風、時雨、杉盛り

—食文化と比喻・象徴をめぐる随感—

中村明

1. 四季を彩る和菓子

詩人の長田弘はエッセイに「季節は街に、和菓子屋の店先からくる」と書いている。古人は花や風という自然そのものから季節の移ったことを感じてきたのだろう。現代人は意外なところから季節の推移を知ることもある。和菓子屋の店先で、ガラス戸に四季それぞれにふさわしい菓子の名が墨書してあるのを見て、ああそういう季節になったかと思う。

和菓子には昔から季節感の漂う名が多い。春秋の彼岸の行事の時期に、もち米にうるち米を交ぜて炊き、半搗きにして、周囲に餡や黄な粉や胡麻をつけた菓子が店先を彩る。同じその菓子を季節に合わせ、春には牡丹の花にちなんで「ぼた餅」と呼び、秋には萩の花に寄せて「おはぎ」と呼び分ける。食に季節のとけこむ文化の象徴だろう。

花見から月見、そして雪見と、季節とともに移ろいゆく自然の風情を追って、日本人は風景を愛でながら時に杯を重ねてきた。雪と月と花、日本の四季を象徴する「雪月花」をそのまま名のる和菓子もあるらしい。白で雪を、淡い青で月を、薄紅で花をほのめかせた薄い皮で、柚子の香りのする餡を包んだものという。

空から舞い降りて来る滴ひとつでも、季節に応じて表情が異なり、感触も違う。やわらかい春雨なら「濡れて行こう」という気にもなろうが、夏の夕

レシピのオノマトペ

—調理の手法を伝える表現—

水藤新子

1. はじめに

インターネットはレシピサイトで溢れている。任意の語句を用いて多種多様のメニュー検索が可能な中、オノマトペは感覚的・直観的にレシピを検索できる有効なキーワードとなっている。調理の専門家だけでなく、一般の利用者が自分のページからレシピを登録できるサイトの草分けとなったクックパッドで試しに「さっ」を打ち込むと、22,460ものレシピが提案される(2019年6月2日現在)。その中から表1の例で記載事項を確認する。

表1 「時短! キャベツとあさりのさっと蒸し」¹

作り方	1 今回はリケンのノンオイル青じそで <u>さっ</u> と出来てお洒落な一品を作ります♪ 2 あさりは <u>ひたひた</u> の塩水につけて砂抜きします。水 150ml に塩小さじ1程度が <u>目安</u> です。砂抜きした後、よく洗います。 3 蓋ができるフライパンに2と◎とキャベツの <u>ざく</u> 切りを入れて蓋をして中火程度でアサリの口が開くまで加熱します。(約5～6分) 4 器に盛り付けたら出来上がり～♪
このレシピの生い立ち	<u>さっ</u> と出来て豪華に見える一品を、 <u>と</u> 思っ <u>て</u> 作 <u>っ</u> て <u>み</u> ま <u>し</u> た <u>♪</u>

1 <https://cookpad.com/recipe/5621677> より抜粋。下線部引用者、以下同じ。◎はレシピ考案者が材料欄に付した記号で、1に示した「リケンのノンオイル青じそ(ドレッシング)」。

食感を表すオノマトペ

—クックパッドのレシピに見るおいしさ表現—

福留奈美、伊尾木将之

1. はじめに

食べ物の食感を表すオノマトペには、「ふわふわ」など音を繰り返す ABAB 型の語が多く、「ふわとろ」に代表されるような ABCD 型も使われる。この他、語基 AB に「り」の音、撥音、促音、長音を組み合わせた「ふわり、ふんわり、ふっくら、さっくり、さくっと、さくさくっ、さっくさく、とろん、とろとろ、とろ〜り¹、とろとろ〜」など多彩な表現がある。それらは特徴的な食材や料理と結びつき、食べた時の感覚を言語化するだけでなく、食べる前に見る商品パッケージや料理名に使われることで食べた、作りたいという気持ちを喚起させるのに一役かう。

21 世紀に入り、誰もが日常の食事風景や食べ物情報をインターネット上に公開し共有できるようになった。1999 年から本格始動したレシピサービス「クックパッド」では、2021 年 1 月現在で 345 万件を超えるレシピを公開している。料理のレシピは、料理名(タイトル)、短い料理説明(キャッチコピー)、レシピ作者名、材料、作り方、コツ・ポイント、レシピの生い立ち、完成写真、プロセス写真などで構成される。また、そのレシピを見て作ったレポート(つくれば)を他者が投稿することもできる。

1 食感を表すオノマトペとして、長音を表す記号「〜」「-」が使われる。

「生クリーム、大好き。」

—食べ物の嗜好は語りを通してどのように共有されるか?—

唐津麻理子

1. はじめに

私たちは食べることを通して食べ物についての好き嫌いや嗜好を身につけていくのであろうが、そのような食べ物の嗜好は、どのようにして他者と共有することができるのだろうか。本稿では、一人の会話参加者の「生クリーム、大好き」という嗜好が、会話相互作用を通してその人物のアイデンティティーの一部として会話参加者間で共有される過程を詳述する。分析資料は、三人の日本語話者が雑談をしている約1時間の録画資料の冒頭の約7分間で、会話参加者たちが箱に入ったケーキを選び取ることから会話が始まり、一人の参加者が生クリームが大好きであることが明らかになっていく。

以下では、言語と食べ物の評価についての先行研究 (Wiggins and Potter 2003, Lakoff 2006, Karatsu 2010, ザトラウスキー 2013, Szatrowski 2014, Noda 2014, 他) を発展させ、嗜好を表す主観的評価が、[Xが好きだ] という発話だけによって示されるのではなく、発話の順番や様々な語りを通して、好みの強さや詳細が積み上げられて鮮明に表されていくことを示す。また、そのようにして表される嗜好が、会話相互作用を通して他の参加者と共有されていくことを示す。また、相互作用を通じたアイデンティティーの研究 (Antaki and Widdicombe 1998) の枠組みを用いて、描かれた「生クリーム、大好き」がその人を特徴づけるアイデンティティーとして行われている活動

会話における食の評価と言語行動

—評価は食前から始まる—

小池千里

1. はじめに

本稿では雑談において参加者が食べ物や飲み物について話している際の食の評価を考察する。私たちが雑談の中で食の評価をする機会を考えると、一般的には今食べている物や過去に食べた物の味覚的評価を想起するかもしれないが、果たしてそれだけであろうか。本研究では会話の参加者が食の評価として味覚以外に何を評価しているのか探求するために、食前の食の評価、つまり、食べる前に行う食活動の評価に焦点を当て、参加者がどのように包括的に食の評価活動を行っているかについて考察を試みる。まず、2. で会話における評価に関する先行研究をいくつか概説した後、3. で食の視覚的評価 (3.1)、食の材料と調理過程の評価 (3.2) について分析を行い、食活動と食の評価活動における包括性 (3.3) について論考し、最後に4. で分析結果をまとめ結論を述べる。

2. 先行研究

本研究の基盤となる Pomerantz (1984) の会話における評価の研究では、評価の後にその受け手が第二評価の発話を言うことにより第一評価に対する同意や不同意を表すことが観察された。また、C. Goodwin and M. Goodwin

テレビの料理番組での視聴者が 食べたくなる食べ物の評価

ポリー・ザトラウスキー

1. はじめに

大規模な食品会社では、消費者の食べ物に対する評価は、一人一人がブースに入ってサンプルを数個食べながらアンケートに答える方法で行われる。しかし、日常生活の中での料理の評価は複数の人が食べながら、人と人とのコミュニケーションの中で動的に作り上げられる社会的な活動である。そこで、テレビの料理番組を対象に料理の評価について考察することにした。

本研究は、テレビの料理番組で、出演者が言語・非言語行動を用いてどのように食べ物を評価するのか、また、食べ物の評価を、どのように互いに影響し合い共同で作り上げるのかという2つの観点から考察する。

2. 先行研究

日本語による食べ物の評価に関しては、食感を表現する際、オノマトペが頻繁に用いられることを示した研究がある(秋山 2003, 早川その他 2005, 早川 2013, ザトラウスキー 2015, 2018 等)。試食会の会話については、その方法論と言語・非言語行動の種類に関する研究(ザトラウスキー 2011)と食べ物の評価を表す「客観的表現」と「主観的表現」に関する研究(ザトラウスキー 2013)とが挙げられる。

おいしさのカタカナ語の類義分析

—「スイートな」「ヘルシーな」「フレッシュな」があらわす意味—

武藤彩加

1. はじめに

日本語学習者の学習上の困難のひとつに、いわゆるカタカナ語の習得があげられる。この点について鳥飼 (2007: 52) では「音声上も意味の面からも言語とずれて使われていることに起因すると推察される」とする。英語を由来とするカタカナ語には、例えば sweet と「スイートな」などの例があるが、両語にはどのような意味の相違があるのかという点に加え、「スイートな」には「甘い」という類似表現もあり、両語の間の意味の相違はどうかという課題もある。本稿では後者の課題について考察すべく、外来語の中でも特に英語の味のカタカナ語に注目し、それらの語の意味の違いについて検証する。具体的には「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ) において味のカタカナ語を含む用例文からそのコロケーションを抽出し、各々のカタカナ語およびその類義表現がどのような名詞と結びつくのかという点を手がかりに類義分析をする。さらにそれらの表現がどのような文脈で使用可能であるかをコーパス内の実例により検証する。現代日本語の書き言葉においてどのように使い分けられているのか、またカタカナ語が使用できる文脈はどのようなものなのかを明らかにすることは、日本語学習者にとって有益な情報のひとつとなるであろう。

トレンドスイーツをめぐる オノマトペのひろがり

—チョコレートの味・香り・食感をどのように伝えるか—

星野祐子

1. はじめに

パリが発祥のチョコレートの祭典として、多くのファンが集う『サロン・デュ・ショコラ (Salon du Chocolat)』。毎年、日本をはじめ世界各地で開催され、会場には世界各国から 100 を超えるブランドが集結する。

さて、同展示会では、『サロン・デュ・ショコラ・オフィシャル・ムック』としてガイドブックが刊行されている。2019 年で 10 回目の刊行になる同書では、毎年 300 以上のチョコレートの見た目、香り、味、食感などが詳細に報告されている。報告されるチョコレートは、タブレットやトリュフといったチョコレートそのものを味わうものから、ケーキやクッキーなど、素材にチョコレートが用いられるものまで、まさに多彩である。

そんなチョコレートの描写に貢献している表現技法のひとつにオノマトペがある。オノマトペの微妙な使い分けにより、さらには、非慣用的で新奇なオノマトペの使用により、描写対象の個性は鮮やかに描写される。

ここでは、5 年分の『サロン・デュ・ショコラ・オフィシャル・ムック』とバレンタインデー時期に刊行される女性誌のチョコレート特集を資料に、チョコレートにみるオノマトペの使用とその特徴を明らかにする。あわせて、日本語学習者がオノマトペを学ぶにあたって、いわゆる参考書ではなく、レアリアを活用することの学習効果を考えたい。

外国人介護士が悩む食事介助の 相互作用フレーム

—「ごっくん」から「嚥下」へ—

石原洋子

1. はじめに

少子高齢化社会である日本において、外国人介護士の必要が叫ばれている。しかし、介護のための日本語は簡単ではない。2017年に、我孫子市の平和台病院では、ベトナムの看護大学を卒業した学生に奨学金を出し、介護福祉士候補生として受け入れる試みを始めた。現在1期生は、介護福祉専門学校2年生となっている。筆者は介護施設で勤務経験がある日本語教師として、介護福祉士候補生の日本語の指導に当たっている。介護福祉士候補生たちは、国家試験や基礎知識取得のための専門的な日本語を学ぶために介護福祉専門学校に通いながら、介護施設でアルバイトをしている。

介護現場で使う日本語で、食事介助の日本語は特に外国人介護士には難しいとされている。介護福祉士候補生を悩ませるのは、誰に向けてどんな目的で発話するかにより、表現と語彙が異なることである。

本稿では、食事介助の場面を取り上げて、相互作用フレームによる分析を試みる。Tannen and Wallat (1993: 59–60) は、相互作用フレーム (interactive frame) を、「お互いが何も言わなくても、その場の状況が理解しあえている概念の枠組み」だと定義している。食事介助の現場での会話は、どのような相互作用フレームが使われ、各フレームで、なぜ、どのように、どのような表現と語彙が使われるのかを考察する。文化的にも、社会的にも未知の状況

「インド人もびっくり」から 「だんご3兄弟」まで

—食生活の引用による弁論パフォーマンス上の
第3空間的駆け引き—

野田眞理

1. はじめに

食のあり方は年とともに変化する。その変化を如実に写しているのは、食品関係の宣伝文句や、食を題材とした流行語であろう。そのような流行りのことばを取り入れることで、私たちは聞き手を会話に引き込もうとする。「外国人による日本語弁論大会」の弁論も例外ではない。本稿では、日本で毎年一回行われる決勝大会で優秀と認められた弁論を対象に、聴衆を惹きつける弁論パフォーマンスの形態を「ひく」技術に焦点を当てて探っていく。特に、聴衆がよく知っている食べ物に関するパフォーマンスの引用が、聴衆の記憶を喚起し、その記憶と弁論の内容を呼応させることで、認識を共有したり、感情を受け止めたりしながら協動的に弁論に参加する様子を検証する。

本稿ではまず、「パフォーマンス」と「第3空間」という理論的概念を紹介する。次に、「ひく」という談話の手法としての引用(杉戸1997)を検証し、聞き手がよく知ることばやパフォーマンスを弁論のパフォーマンスに埋め込むことが、パフォーマンスの多重構造をもたらすことを論じる。その上で、本研究の資料となった弁論を紹介し、食べ物に関する引用がもたらす様々な効果を第3空間におけるパフォーマンスの観点から検討する。最後に、検証で明らかになったことを踏まえ、聞き手の記憶を巻き込むコミュニ

大正期の『少女の友』の 食のことば

石井久美子

1. はじめに

近代の食文化について、文明開化以後、洋風化の波に乗った日本は、「公」の面において西洋食を定着させることに成功し、「私」の面では折衷料理が普及したといわれる(チフィエルトカ 1997: 165–166)。日本語史から見れば、近代に「ふえた語の多くは、明治時代には漢語であり、大正・昭和時代には外来語である」とされる(宮島 1967: 1)。上記の状況と考え合わせれば、大正期には、洋食を表すことばが外来語によって取り入れられ、定着していたことが予想される。

そこで、本稿では、少女雑誌を資料に、前半では当時の飲食に関する語の出現状況を語種別に調査し、後半では飲食に関する外来語に焦点を当て、その様相を明らかにする。

2. 先行研究と研究方法

2.1 先行研究

食物学や民俗学の分野においては、チフィエルトカ(1997)の洋食の受容方法の分類や、江原(2012)の西洋文化の導入による新しい料理と料理技術が家庭内に入っていき様子を追ったものなど、近代の食文化の状況を示した

どう描かれる？

漱石・鷗外の“食べる”

高崎みどり

1. はじめに

小説の中に描かれる食卓の光景は、典型的な家族団欒のような幸せなものばかりではない。家族の不和や経済的不如意、登場人物たちの性格や人間関係などが、暗示的に描かれることも少なくない。反面、辛辣な批評や過酷な運命の、ちょっとしたすき間に流れる温かさやほほえましきで、ほっとさせられることもある。ここでは近代文学の2大文豪といわれ、ほぼ同時代に創作活動を行った夏目漱石・森鷗外の作品のいくつかにおける食事のシーンをとりあげて、それらがどのような意味をもたされているのか、作品中でなされる食事の人々やその周辺の描写、食べ物の描写等々も含めて、摂食場面に託された意味を追究したい。家庭での食事場面だけでなく、外食も含め、またお菓子や果物、飲み物等の摂食場面全般に目をむける。

以下では、それらを①摂食場面での話題、②回想の中の摂食場面、③登場人物の食べ物に対する態度、④象徴的に食べ物や摂食場面が使われる場合、の4つのケースにわけてみていくこととする。なお、この分類は排他的分類ではなく、ひとつの場面にはいくつかのタイプが重なって現れることもある。